

ド・ロ神父の作業場跡地

フランス・ノルマンディの貴族の家に生まれたマルク・ド・ロ神父（1840-1914）は、ベルナール・プティジャン神父の誘いに応じてパリ外国宣教会に加入しました。彼は 1868 年に来日し、1879 年に外海教区の主任司祭を任じられました。

ド・ロ神父は、神の言葉を広めることと同じくらい、教区の人々の生活の質を向上させることに情熱を傾け、建築家と起業家としての才能と私財をこの目標に捧げました。森に覆われた急峻な丘陵地であった外海地域の地形は農業に適しておらず、大平は近隣の集落と同じように貧しい集落でした。1884 年から 1901 年にかけて、ド・ロ神父は村人たちに丘を整地させ、サツマイモ、茶、小麦を栽培するための段々畑をつくらせました。集落の人々は、長崎の外国人居留地の住民に紅茶と小麦粉で作ったパスタなどの麺類を売りました。

主に石でつくられたこの建物は、主に農機具を保管する納屋として使われていました。この建物を設計したのはド・ロ神父です。才能豊かなアマチュア建築家でもあったド・ロ神父は、出津教会や長崎の羅典神学校などの設計も手掛けました。重厚な内壁により、この納屋は海から吹き込む猛烈な風にも耐える構造強度を持っています。ド・ロ神父はよく志津から馬に乗って農作物を見に行っており、建物の奥の方には神父の馬が繋がれていた綱の輪が残っています。

1975 年に設立されたお告げのマリア修道会の前身は、岩永マキがド・ロ神父の指導の下で創設した女性奉仕団体「十字会」でした。お告げのマリア修道会は、再びこの耕作地で農作物を作ることを計画しており、納屋は作業場として建て替えられる予定です。